

Library Mate

『源氏物語講義 若紫』刊行にあたって

図書館長 板垣弘子

この春、本学園では図書館所蔵下田歌子先生の「若紫」草稿を翻刻出版しました。刊行に携わった一人として、二、三記したいと思います。

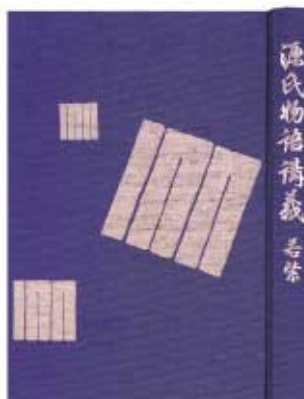
下田先生の『源氏物語』関係の著書は、先生の晩年に二冊(『源氏物語講義 首巻』『源氏物語講義 第一巻』)刊行されています。前者は『源氏物語』の総論的なものであり、後者は『源氏物語』本文(「桐壺」「帚木」「空蝉」三帖)の注釈書です。後者の刊行直後先生は病没(昭11・10)され、残念ながら「夕顔」以降の刊行は実現せぬままに終わったのです。

昭和42年、本学図書館に先生のご遺族から「若紫」の草稿が寄贈されました。その執筆形式は『源氏物語講義 第一巻』と同じです。そこで今回の「若紫」の刊行は、「第一巻」と同じ形式で翻刻出版することにしました。草稿は未定稿だけに、先生のご苦心の跡がうかがえることもあり、あくまでも草稿を尊重しました。

今回翻刻の『源氏物語講義 若紫』をとおり、「下田源氏」の特色の一端にふれたいと思います。『源氏物語』は、谷崎潤一郎、与謝野晶子、瀬戸内寂聴など多くの作家に

よって現代語訳されています。が、それらは原典との対照形式ではなく、あくまでも各作家の口語訳中心での構成です。それに対して「下田源氏」は、「本文」を上段に「口訳」を下段に、さらに「解釈」と「評説」を加えた対訳形式です。一方内容からは、紫上にとっての乳母の存在や源氏の紫上に対する態度などを、女子教育の観点から捉える姿勢に「下田源氏」の特色がみられ、『源氏物語講義』と題された意図がうかがえるのです。また、先生ご自身の宮中での見聞や幼少期の体験などが「注釈」で生かされているのも、特色のひとつといえるでしょう。

学生のみなさん！是非図書館に足を運び、



、『源氏物語講義 若紫』を手にとり、下田先生の一端に触れてみて下さい。

下田歌子著、
板垣弘子編輯
実践女子学園
2002.3

(913.36/Sh51)

『源氏物語講義 若紫』に寄せて

- 「解説」に書き残したことなど -

大学 国文学科教授 横井 孝

今年の3月20日、卒業生が巣立っていったその当日、手のひらに乗ってしまうような可愛らしい大きさ(B6判・270ページ)の本が世に出されました。本学の創立者・下田歌子の著書『源氏物語講義 若紫』です。

66年前に亡くなった著者の本が、なぜ今ごろ出版されたのか。

著者には生前に多数の著作があり、『源氏物語』については、総論・解説編にあたる『源氏物語講義』首巻が1934年に、そして桐壺の巻から空蝉の巻までの注釈をおさめる第1巻が1936年に、それぞれ出版されてはいたのですが、著者が亡くなり、戦争のドサクサがあって、続編の予定があったにもかかわらず、刊行を見ないままになっていたのです。

ただその後の巻である若紫に関しては原稿が遺されていたのですが、手書きであるだけでなく、まだ最終的な推敲をする直前の未定稿で、はなはだ読みにくいものでした。それが今回、図書館の方々の努力によって翻刻され、見やすい活字の形に整理されたわけです。

『源氏物語』が書かれてからこの1000年の間、さまざまな人たちがその読解にチャレンジし、膨大な注釈書がつくられています。ともすれば、その森のような著作の中で迷子になってしまいそうですし、1つ2つの本を書いたとしても、たちまち森の中に埋もれてその本自体の特質を発揮しにくいものですが、今回の本書に関してはどうでしょうか。

話が脇にそれるようですが、その説明をするために、以下ちょっとおつきあい下さい。

鶴見大学の岩佐美代子名誉教授は、昭和

天皇の第一皇女・照宮成子内親王に「宮仕え」した経験のある、稀有な経歴の持ち主です。氏は専門の中世文学を研究するに際して、平安・中世の女房たちが日記のなかでしばしば告白する主君への信頼・愛情・憧憬といったものが、その経験を通してつよく実感できたのだといえます(『宮廷に生きる』笠間書院刊)。

しかも、女房生活を体験した者でなければわからないというのでは普遍的問題たりえない、という予想される反論に対して、あらかじめ「それは想像力の貧困と申すもの」と述べています。「なま身の人間として生きた者の……やむにやまれず書き残した作品」として見れば、昔の女房たちの日記は理解できるはずだ、とも指摘しています。確かに研究者としては正論なのでしょうが、読者をひろく考えるならば、宮廷生活を描く文学の読解については、やはり「体験」の有無は大きいとしなければならぬでしょう。「想像力」を主張されても、王朝文学のピギナーには縁遠い話です。

さてそこで本書『源氏物語講義 若紫』に話が戻るのですが、既刊の第1巻にも、「自分が宮中奉仕の頃の事であるが……」とか、「自分が宮中奉仕中(明治の御宇)自分等の住む局に……」などと宮中での実体験を語る箇所があちこちに散見されることを指摘しないではいられません。今回の若紫の巻は、紫式部の原典自体に宮中の場面が少ないので、おのずと宮殿の中での体験話は後退せざるをえないところではあるのですが、それでも著者は「自分は嘗(かつ)て十数年前……」「自分が幼時……」と、みずからの体験に引きつけて物語を具体的に理解させ

ようとしています。実際的な配慮です。

考えてみれば、著者自身が実際の宮仕え経験者であり、岩佐氏のような年若い時ではない、成人してからの体験者でありましたから、この本に書かれていることがからこそ、私たちに身近なところでの「女房の視点による『源氏物語』注釈」というものではないでしょうか。別に宮仕え経験の「本家争い」をするわけではありませんが、以上の事実は『源氏物語講義』がこんにち存する意義の1つとして数えあげておく必要があるかと思われます。

ところで、1000年前という時代に、400字詰め原稿用紙に換算して2400枚という量、そしてあの豊富な内容(質)の『源氏物語』が書かれたということは驚異というしかありませんし、さらにその作家の偉大さを思わずにはられません。この作品を見れば、かつて読者が作者の創造する作品を押し戴くような関係、つまり作者と読者のバランスシートが過重に作者に傾いていたというのも、なるほど納得せざるをえないでしょう。

しかし、1970年代ころから(日本では1980年代から)文芸理論の世界では、作家と読者の位置が見直されるようになってきています。読者が存在するからこそ、ひとが読むという行為を通して作品がその脳裡に創造されるのであって、今まで「作品」と称していたものは、紙の上のインクに過ぎない、とまで考えられるようになってきたのです。『源氏物語』に引きつけて言えば、いかにその質量ともすぐれていたにせよ、その長い年月の間、各世代で読み継いできた読者たちがいたわけで、その人たちの功績も認めなければならない、ということになるわけでもあります。

ただし、読者が単なる読者の範囲でとどまっている限り発展性はありません。『源氏物語』の少なからぬ読者が注釈書・研究書の形で書き残し、のちの読者たちを刺激

しレクチャーしたからこそ、読み継がれてきたといういきさつがあるのではないのでしょうか。作者と読者の間にあって読者と読者をつなぐ役割を担う人たちにも注目する必要があります。と思います。

『源氏物語講義』は、そうした役割をみずから任じた人の著作ではありますが、未完のためか、この作品の研究史の中ではまだ評価が定まっていなようです。若紫の巻が上梓されたことを機に、この本の再評価がなされ、研究史上の定位を得ることを願ってやみません。

* 歴史に名を残した人物について、このように敬称をつけないことがむしろ敬意をあらわすことになる、ということを私は信奉しています。



「若紫」草稿

「若紫」帙

「源氏物語講義」
首巻，第1巻

源氏物語講義 首巻 下田歌子著
実践女学校出版部 1934 4 (913 36/Sh51/首)
源氏物語講義 第1巻 下田歌子著
実践女学校出版部 1936 5 (913 36/Sh51/1)

下田歌子伝記ビデオ紹介

図書館事務部 次長 浪 岡 正 継

学園が製作した下田歌子伝記ビデオが完成した。

製作目的は、創立百周年を期に実践の建学精神を確認すること(現役の教職員や学生の殆どの人が下田歌子をよく知らないため)と、下田歌子の生涯をとおして、教育とは何かを改めて問う意味があった。分かりやすく内容を伝える表現媒体としてビデオが選ばれた。

製作委員は、板垣弘子・飯塚幸子・須賀恭子・大関啓子・部谷紀久子・茂木コウ(敬称略)の各氏に図書館職員3名があたった。歌人・源氏物語研究者・教育者下田歌子のどこに焦点を当てるべきか議論となり、時間は当初30分ぐらいにまとめるということでスタートした。

ナレーターは、当初から渡辺美佐子氏にお願いしようということになった。実践の卒業生であり、高名な女優(昭和28年の映画『ひめゆりの塔』以来、『果てしなき欲望』で昭和34年第1回ブルーリボン賞助演女優賞受賞等)であり、何よりも下田歌子の故郷岐阜県岩村町が主催する『女城主』(詳しくは岩村町のホームページ参照)に就位されていることから、最もふさわしい適任者であった。

ビデオ制作過程のなかで最も大事なものは、**シナリオ**作成である。製作委員会の会合のなかで、『下田歌子先生小伝』をベースに『香雪叢書』や『下田歌子先生伝』から、教育者としての下田歌子に焦点をしばり、引用の言葉を決め、実写フィルムや喜寿記念の肉声を含め、更に故郷岩村ロケや実践三キャンパス風景等を取り入れた構成にした。テレビのドキュメンタリー番組を数多く手掛けられている野田英夫氏によるシナリオが、第四稿を重ね最終稿を迎えようとして、著作や写真等ではどうしても歌子像が平板になり、具体的な像を結ばないということで、急遽、実際に下田歌子から教わった方々による**インタビュー**を採り入れることとなった。堤敏子氏・戸野原須賀子氏・小林ヨシ氏の生きた証言は、下田歌子の教育への情熱と教えの母としてのエピソードを伝えている。

卒業式の挨拶で「教えの母として、皆様に誇れる恥ずかしくない教育をしてきたつもりです。今日をもって皆様にお返しいたしますので、どうぞ大切になさってください」という意味の言葉や、晩年死期が近づいた時、「生徒に会いたい」と言い出され、生徒全員が見舞いをした話などが、下田歌子と教え子たちの熱き関係を物語っている。

プロのわざとは何か。音楽やナレーションやテロップが、静止画が多く躍動性の少ない映像を、活きた作品に変えるのである。

『はばたけ！わが娘らよ 下田歌子の生涯』

構成：野田英夫 ナレーター：渡辺美佐子
製作補助：NYX 製作：実践女子学園 2002年
45分 協力：教育文化振興実践桜会





学生に薦める本

認知科学の方法

大学 生活環境学科 助教授

佐伯 胖 著 東京大学出版会 1986 .12
(大学・短大図書館所蔵 141 5/Sa14)

橘 弘 志

おもしろい研究って何だろう。それよりも研究ってそもそもおもしろいものなんだろうか。

「研究」というと一部の偉い先生たちが難しいことをやっているように聞こえるかもしれない。「勉強」とか「学習」、「学ぶこと」などと置き換えると、かなり身近な問いになるだろう。今度は、「おもしろい」と「勉強」がどうやって結びつくのか、って声が聞こえてきそう。でも大学というところは、難しいことを勉強する(勉強させられる)場ではなく、自分のやりたいことを自ら学んでいく場、ということになっている。(「大学生」というのは「大きく学びながら生きている人」と言われたことがある。なるほど)。だとすれば、おもしろいことをおもしろく学べた方がいいし、その結果おもしろいことが分かった方がいい。それではどうしたらおもしろい研究ができるのだろうか。どのようにしたらおもしろく学べるのだろうか。

この「認知科学の方法」は(題名は固くて難しそうだが)自らおもしろく学び、おもしろい研究をするためのガイドである。結論から言ってしまうと、こうすればおもしろくなるというような、そんな都合のいいハウツー(方法論)は存在しない。学ぶべき、研究すべきテーマにしても、おもしろいテーマとおもしろくないテーマがあるわけではない。何をやってもいいし、どんなやり方をしてもいい。では、世の中おもしろい研究だらけなのかというと、やっぱりおもしろい研究もあればおもしろくない研究もある。その違いはいったいどこにあるのか、いったいどんなものがおもしろい研究なのか(やっている本人もおもしろいし、それを学ぶ人もおもしろいもの)ということ、実例を持っておもしろく示しているのが本書である。

題名の「認知科学」という言葉を聞いたことのある人はそんなに多くないだろう。(かく言う私もまったくの門外漢である)。本書の冒頭で、次のようにその特徴をあますことなく書きあらわしている。「おもしろい研究者たちがおもしろい研究をしているところです。」それだけでは何のことも見当もつかないのでちょっと補足すると、人間についての、ふだんの行動とか考え方とか理解の仕方とかを理論化する学問である(こう書くと実際におもしろくないが)。研究のネタはどこか別の世界に存在するのではなく、人間すなわち私たちの日常生活の中にある。私たちがふだん当たり前のことのように判断し行動しながら生活していること、まさにそのことがテーマであり、「当たり前のこと」を別の視点で見直してみることもおもしろさに気づかせてくれるのだ。私たちがなぜ「当たり前のこと」をするのかとあらためて問うてみると、たいていそれは「当たり前のこと」だからであり、実は説明したり実証したりすることはなかなか難しいのである。そしてそこにおもしろさがある。

私たちの生活にはむろん、私たちを取り巻く社会や文化、生活環境との関わりが欠かせない。私たちの生活の「当たり前」を見直すことから、社会や文化や環境についての「当たり前」(日常生活での常識に加えて学問上の常識も含まれる)を疑うことができるかもしれないし、ひょっとすると新たな見方や価値観を見出すことにつながるかもしれないのである。

私たちがふだん当たり前のことのように判断し行動しながら生活していること、まさにそのことがテーマであり、「当たり前のこと」を別の視点で見直してみることもおもしろさに気づかせてくれるのだ。私たちがなぜ「当たり前のこと」をするのかとあらためて問うてみると、たいていそれは「当たり前のこと」だからであり、実は説明したり実証したりすることはなかなか難しいのである。そしてそこにおもしろさがある。

図書館でも楽しく 豊かな読書を

短大 図書館学課程 教授

石川 亮

実践女子大学・短期大学の図書館はその活動に優れた側面をいくつか有していますが、その一つに図書の貸出冊数の多さがあります。

このことは学習の資料として利用するのみではなく、相当数の学生に本を読む読書習慣が身に付いていることをも表していると思われまふ。ある学生読書調査(対象49千人回答46千人)によると、講義や勉強に関係する本よりそれに関係しない本で「面白い本、楽しみや夢、気分転換、人生生きる糧」に関わるもののほうが少し多く読まれています。このことは読書習慣のある学生にとっては学習資料と同程度以上に本人の個性や楽しさによる読書が行われているといえまふ。

読書習慣形成の始まりには学習・勉強以外の多様なジャンルの小説、ノンフィクションも含めて幅広い多様な本を提供し、読者本人の趣向に見合うものから主体的に選択してもらうことが必要であるとする「読書理論」があります。

実践女子大学・短大学生の貸出年間平均1人あたり冊数は13冊(平成13年度総貸出冊数÷在籍学生)ですが、私立大学の総平均の貸出冊数が7冊(国立大学9冊)であることに比べると大きい数字です。

先ほどの学生読書調査では一月平均5.4冊読んでおり、年間では相当に大きな冊数が推定できます。このことは本学でも学生が現代の若者として主体的・個性的に選定できる仕組みを工夫し図書の品揃えを更に豊かに工夫することにより、図書館の利用を更に飛躍させ貸出冊数を増やすことが可

能であろうといえまふ。

学生について従来は「知的エリートであり大学では文章を読み本を読解することが前提である」と考えられていたことはもう成立しないという趣旨を、前共立大学学長阿部謹也先生その他が言われております。

学生は現代の若者と同じ個性・趣向をもっているとして対応することが必要であると阿部先生も言われておりました。

この大学・短大は学生を豊かに伸びやかに育てることを行ってきたように思われまふ。阿部先生の言われることと、本学のこれまでの方向を踏まえると学生には図書館や本学の学習教育環境の対応の方法も「多様なメディア利用指向の強い現代の学生」向けに学習環境・指導法など大いに変化させることが有効といえまふ。

図書館サービスもこれまでよりも、幅を広げることが有効であろうと思われまふ。このことは進学予定の高校生をこの学園に更に惹きつける要因の一つになると思われまふ。

この3月に文部科学省の学生課編集の雑誌「大学と学生」に同じ趣旨の文章を記載しました。学生課からは図書館情報サービスと併せて現代学生の趣向にあう立場からの図書館サービスの側面を書いて欲しいとの要望がありました。

図書委員会その他によりこの図書館のこれからの発展に寄与することができれば幸いです。

「大学と学生」447号(2002.3)

特集・大学図書館(大学図書館所蔵)

Library Mail

= 収書ガイド =

大スター達の新人時代 Their First Time in the Movies

どんな著名な人物であっても、必ず新人時代がある。本書は、サイレント映画に始まるハリウッドで星の如く輝く映画トップ・スター100人以上の新人時代と初出演作にスポットを当てたものである。

本書では、映画の歴史を以下の6つの時代に区分し、その時代を彩った代表的なスターの新人時代を詳細に紹介している。下記の表中()の人数は詳細に取り上げられたスター達の人数である。

- 1900 - 1919 : スター・マシン(映画)の誕生 (2人)
- 1920 - 1929 : 夢工場の隆盛 (3人)
- 1930 - 1939 : 映画の黄金時代 (16人)
- 1940 - 1949 : 戦争と平和 (5人)
- 1950 - 1969 : テレビの脅威と映画撮影所の衰退 (18人)
- 1970 - : 現代映画 (15人)



新人時代の肖像や映画の一場面など300枚以上の写真がふんだんに使われており、否が応でもその時代がどのような時代であったかが感じられてくるから不思議である。トム・クルーズやブラッド・ピットなど1980年代以降のスターの雰囲気は現在とほとんど変わらないが、往年の名優、痩せたジョン・ウェインや長髪のデ・ニーロなど違和感たっぷりの肖像が見られる。

なお、本書には30以上の映画の場面を収録した60分のビデオとDVDが付属している。どちらも貸出不可であるが、図書館ブースを利用して見ることができる。

Their First Time in the Movies / Les Krantz .-

Woodstock: Overlook Press 2001 .- 156p .; 29cm .#1videotapes+1DVD disc(791 A3 - K89T)

『館員の横顔』

はじめまして、4月から図書館の契約職員となりました平部るり子です。おもに短大におりますが、週に一度くらい大学にも行きます。細い顔にメガネ、ほさほさの頭をしているのが私です。

つい最近、オンライン書店に本を注文しました。大学のほうの図書館にあったとある本で、奥付を見ると初版は1981年でした。もう20年も前の出版なので、今、近所の本屋さんへ行っても見あたらなかったわけです。

けれども仮に20年前、その本を目にしたとしたら？ 私の興味をひかなかったでしょう。当時の私と今とは、関心事が違うのです。今はぜひとも手許に置いておきたいと思うのに。

新刊本は本屋さんのほうが早いかもしれませんが、そのかわり、図書館は本屋さんにはない本でいっぱいです。時期を逸してしまって出会うことのなかった本がたくさんあるはずなのです。

皆さんも、図書館の本を見直してみたいかがでしょうか？ それにしても、注文した本、絶版でなくてよかったな～。

❀ ❀ ❀ いんふお-め-しょん ❀ ❀ ❀

2002年7月～2002年11月

大学図書館

開館時間

通常 月～金 8:50～18:45
土 8:50～16:00

試験期 (7/1～7/29)

月～金 8:50～18:45
土 8:50～17:00

夏休み期間 (7/30～9/20)

月～金 9:00～16:00 土曜閉館

休館日

書庫整理日：毎月末の火曜日

夏休み期間：毎週土曜日

8/8(木)～8/17(土)

試験期の貸出

7/1(月)～7/24(水) 3日間貸出

夏休み特別貸出

期間：7/25(木)～9/12(木)

冊数：無制限

返却日：9/26(木)

卒論作成者のための特別貸出

対象：博士論文・修士論文作成者
卒業論文作成者(全ての学科)

受付期間：10/1(火)～11/7(木)

貸出期間：貸出日から30日間

冊数：無制限

特別貸出対象資料は、図書のみです。

指定図書・雑誌は通常貸出です。

短期大学図書館

開館時間

通常 月～金 9:00～17:30
土 9:00～16:00

試験期 (6/10～7/24)

月～金 9:00～18:00
土 9:00～16:00

夏休み期間(7/30～9/20)

月～金 9:00～16:00 土曜閉館

休館日

書庫整理日：月中旬の水曜日

夏休み期間：毎週土曜日

8/3(土)～9/7(土)は、夏期休業
及び蔵書点検のため休館。

試験期の貸出

7/1(月)～7/24(水) 3日間貸出

夏休み特別貸出

期間：7/25(木)～

冊数：図書 無制限

7/25(木)～9/12(木)

AV資料 6冊

7/25(木)～9/19(木)

指定図書 3冊

7/25(木)～9/20(金)

返却日：9/26(木)

雑誌は通常貸出です。

書庫整理のため、10/9(水)は閉館します。

常磐祭のため11/8(金)～11(月)は閉館です。

詳細や変更は掲示等でお知らせします。

編集後記

ライブラリーメイト28号はいかがでしたでしょうか。

今回は、学祖下田歌子先生にスポットを当ててみました。皆さんに、学園の歴史についてより理解を深めていただけたのではないかと、と思っています。

ライブラリーメイトに関するご意見・ご感想などありましたら、図書館までお寄せ下さい。

Library Mate 第28号 2002年7月

発行所 実践女子大学図書館
東京都日野市大坂上4-1-1
URL: <http://www.jissen.ac.jp/library/>
実践女子短期大学図書館
東京都日野市神明1-13-1
URL: <http://www.jissen.ac.jp/library/jcol/>

発行責任者 板垣弘子